

INTERVIEW

当事者が国会議員に

立つことで変わる

れいわ新選組 木村英子議員



インタビューの飯田さん（左）と木村議員（右）

今回、月刊きょうされん TOMO 編集委員とともに木村議員の取材を担当したのは、ワークセンターこむたん（東京都）で働く飯田輝一さん（なかまニュース特派員）。

木村議員から「好きなことは？」と問われ、「ハンドサッカー」、「夢はオリンピック選手と英語で話したい」と語る24歳の若者です。

——木村議員は、地域で自立生活して障害者運動にとりくんできたなかで、なぜ国会議員になろうと思ったのですか。

私は長年、とくに重度訪問介護の制度化にとりくんできました。この制度は1974年にできた東京都重度脳性麻痺者等介護人事業という制度が元で、施設から出てきた人たちが国や東京都、市町村に介護料を要望して実現したものでした。しかし、行政への草の根運動だけでは国には十分に伝わりませんでした。もう50年近く経っているのにまだこの制度を認めていない自治体もあり、その地域で暮らしている障害者の方たちは本当に困っている状況です。親も高齢で地域で自立したくてもできない、地域の中に受け皿が足りない。働く場もないし、「家を借りたい」と言っても断られ、交通アクセスも悪い。地方行政に対しての運動だけでは解決しない、国の制度化が必要なのに十分に伝わっていかないと思

いました。

山本太郎さんから「一緒に政治をやりませんか」というお話をいただいた時、体調の面や体力的な不安がありました。でも障害の当事者が国会議員になることで世論が動くだろうし、多くの人に知ってもらうことになる。

「障害のある人」は、どんな生活をして、どういうことで困っているか、当事者が立つことでいろいろ変わるということを望んでいました。



——木村議員をはじめ重度障害のある国会議員が誕生して、国会のハードやソフトの面で改善されたところ、まだ改善されていないところを教えてください。

ハード面は国会議事堂の玄関口の階段の改装とか、議場に車いす席が設けられました。それ

から船後議員の場合は人工呼吸器をつけているので議場にコンセントが設置されました。

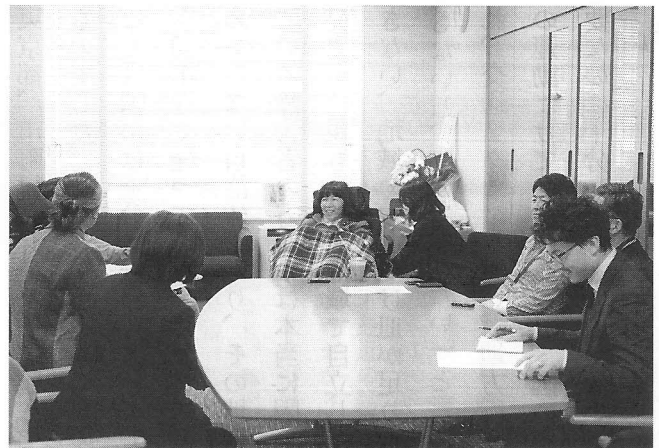
ソフト面では、船後議員の場合は議場で質問する際の時間を止めていただいたり、私の場合だと適宜水分を取らせてもらったり、声が出ない時に代読していただくという配慮が認められました。

改善されていないところとしては、国会の本会議場で質問に立つ際、いまはまだバリアがあって質問者席のところまで行けないんです。いまのところ、その機会がありませんけれど。

——実際に国会議員になって、一番のインパクトはなんですか？

一番衝撃的だったのは、国会議員になると重度訪問介護が使えなくなる、就労が認められていないということでした。これは、重度訪問介護を使って地域生活をしている中では感じなかったことです。国会議員になる権利があるはずなのに、障害者は重度訪問介護の制度が弊害になるという現実を突きつけられました。

ここから変えるしかない、障害者が議員にな



ることを制度が妨げていることを知ってもらいたいと、思い切ってメディアに訴えました。

——重度訪問介護を就労の時にも利用できるように制度拡充していく上でのポイントは何かですか。

障害者にとっては、介護者がついてはじめて平等の社会になると思っています。でも介護が必要だからといって社会の中で活躍できないのはおかしい話です。長期の外出はダメとか、外出の内容にも制限があります。障害者にとって地域で生きるためのあたり前の権

利が十分に保障されていないのが現実です。就労は元々認められていません。

どんな場面でも健常者の人と同じように生きていけることが大事だと思います。重度訪問介護で「普通に働きたい」とか「通学にボランティアさんをつけたい」と言っても、認められない現状にとっても納得できません。

今、参議院議員会館や国会にいる時間の介護は、参議院が負担しています。ここに来ていない時間は市町村が今まで通り重度訪問介護を出しているんです。参議院議員だけが就労のお金を認められて、重度訪問介護を受けている一般の人は働けない、通学できないというのは差別だと思っんです。

私は「登院する時に私がここで十分に活動ができるように重度訪問介護の改善をお願いします」と要望していますが、何も改善されていない状況です。

——重度訪問介護を使った生活の面ではどんなことをめざしますか。

施設やグループホームでは、一人の職員さんが何人かの障害者の方をみななければいけません。介護はかなり重労働です。私はやはり、

一人にひとりの介護がベストだと思っています。そういうこともあって障害のある人が地域で生きるための介護保障を要求してきました。重度訪問介護を使って障害者たちの夢を実現してきています。

しかし、ヘルパーさんが足りません。足りない以前に重度の人の介護を担うヘルパーさんがいる事業所が少ないんです。なので、わたしたちの場合は、自分たちで事業所を作っています。



国土交通委員会での赤羽大臣とのやりとり風景



木村英子（きむらえいこ）れいわ新選組所属の参議院議員 1965年5月11日生まれ、全国公的介護保障要求者組合・書記長、全都在宅障害者の保障を考える会・代表、自立ステーションつばさ・事務局長

——さいたま市が市の単独事業で在宅勤務をされている重度障害者2人を対象にして重度訪問介護を適用しました。どのように評価していますか。

それはとても良いことだと思います。実際に家の中で仕事をしたいと思っている人は少なくないと思うので、それで重度訪問介護を使えるというのは画期的だと思います。介護者を取られてしまうと命にかかわります。トイレや食事ができないということは生命線ですよね。生存権すら脅かされてしまうので当

然だと思っています。

——最後にきょうされんの「月刊きょうされんTOMO」と「なかまニュース」の読者、作業所で働いているみなさんにひと言メッセージをお願いします。

私は今、多摩市というところに住んでいて、「自立ステーションつばさ」という事業をしています。

そこには重度の障害のある人が、例えば「地域に出たいな」「親元を離れて暮らしたいな」「恋愛をしたいな・結婚をしたいな」とか：普通にそういう夢を叶えたいと思う人が集まる「自立の家」っていうのがあるんです。そこで地域で生きる練習をして、そこから巣立って自立生活をすることを応援する活動をしています。

自分の思っている夢があったら我慢せずに、諦めずに叶えていくためにいろんな人に出会ってチャンスを手掴んでほしいと思います。思ったことは口に出してほしいと思います。あと国会議員になりたい人はぜひ、めざしていただきたいですね！